芦屋大学論叢　第79号
（令和5年7月29日）抜刷

布川準一郎の「心耕学園」に関する一考察（1）

―戦前昭和期の新潟県西越村における新教育実践―

三　羽　光　彦

布川準一郎の「心耕学園」に関する一考察（1）

－戦前昭和期の新潟県西越村における新教育実践－

三　羽　光　彦
芦屋大学臨床教育学部特任教授

はじめに

昭和戦前期の新潟県三島郡西越村（現・出雲崎町）の布川 準一郎の教育については、今日では、教育研究者の間でもほとんど知られてないようである。しかし、当時は、本格的な独自の「新教育」実践として有名であった。小学校と実業補習学校を男女ともに一連の制度として一体化し、自由教育や労作教育、そして塾風教育などをその内容とした特徴的でユニークな教育として注目された。西越村ではこの一連の教育経営を全面的に布川準一郎にゆだね、布川はこの学校を「心耕学園」と命名して理想の教育の場としたのであった。

布川準一郎の「心耕教育」については、『日本新教育百年史』（1969 年、第 5 巻中部編の新潟県の章：小菅任助・松岡市栄門執筆）において紹介され、「当時草深き片田舎において、このような画期的な新教育が開花結実できたということは、一つの不思議と言わなければならない[1)]」と述べられている。また、『新潟県教育百年史』（大正・昭和前期編：新潟県教育委員会、1973 年）には、「三島・心耕学園と布川校長[2)]」という項目で 4 頁にわたって記述されている。この「心耕学園」関係の資料群については、その散逸を惜しんだ石黒秀一（元新潟県小学校教諭）によってかつて調査が行われた。そして『新潟県教育百年史』を執筆した五百川 清（元新潟県中学校教諭）は、布川準一郎と「心耕学園」のこれらの資料の価値を高く評価し、貴重な教育遺産として残すため、石黒の収集した資料の一部を復刻して『新教育の先駆者――資料　布川準一郎と心耕学園』（新潟雪書房、1994 年）として自ら出版している。

しかしながら、この布川準一郎の「心耕教育」については、今日では研究対象とされることはほとんどなく、上記の論稿以外、布川準一郎あるいは「心耕学園」に関するまとまった先行研究は見当たらない。そこで、この論文では上下 2 編にわたって、布川準一郎の教育思想・教育論、「心耕学園」の学校経営、教育実践などを紹介・分析し、あわせてこの「心耕教育」において特徴的であった、実業補習学校を地域教育の中心に置く全村教育の意義について考察したい。なお、本研究は、2023 年度学術振興会科学研究費補助基盤研究(C)「近代日本における実業補習学校と地域社会に関する調査研究」の成果の一部である。

1.西越村と学校の沿革

（1）西越村

西越村は、1889（明治 22）年 4 月 1 日、 町村制施行により三島郡久田村、上中条村、沢田村、乙茂村、大寺村、馬草村、藤巻村、柿木村、滝谷村、吉川村、神条村、高畑村が合併して発足した。1901（明治 34）年 11 月 1 日には、 三島郡中越村・八手村を併合して新たに西越村を置いた。第 2 次大戦後には、1957（昭和 32）年 6 月 20 日、三島郡出雲崎町と併合して新たな出雲崎町となり、西越の村名は消滅した[3)]。

西越村は新潟県のほぼ中央部の日本海よりに位置し、北隣は佐渡への窓口として繁栄した出雲崎である。村は、中央部を北上する島崎川の河谷に水田が発達しその周りに山林が取り巻いていた。面積は20平方キロほどで、1930（昭和5）年の国勢調査によると、人口5,664人（戸数1,061戸）の農山村であった。明治末期には島崎川に沿って越後鉄道が敷設され、1912（大正元）年12月に村の中央に出雲崎駅が開業した[4)]。

1920（大正9）年には村内に電灯が通じ、駅前を中心に旅館・料理店・各種商店が建ち並ぶなど、1920年代以降、駅前が村の中心街となった。この時期、西越村は「農村復興のブームにのって産業組合や農業倉庫が設立され、農業用水路や農業道路の開設が盛んに行なわれた[5)]」といわれている。西越村の主産業は一貫して米作であるが、昭和初期から養蚕が加わった。

（2）小学校の1村1校制

昭和初期の西越村には、八手尋常小学校と中越尋常小学校を合併した上西越尋常高等小学校が村南部に存在し、村北部にあった西越尋常小学校と並立していた。明治後半以降、新たな西越村として統合後も、村内ではともすると地区間の感情や利害の対立が表面に出やすかった。そこで村当局は、小学校を統合することでそうした住民感情をなくそうと構想するようになった。

新潟県では、明治末期から、教育財政整理や旧村（字（あざ）とよばれる基礎的共同体）間の対立意識をなくすため、県や郡の当局からは1村1小学校を推奨する動きがみられた。第1次大戦後の1918（大正7）年に県学務課は「初等教育上留意すべき要項[6)]」を通牒したが、そのうちの重要項目として、小学校は、通学上などやむを得ない場合を除いて「一町村一校を標準」とすることを指示した。その後、県や郡はこの方針の下で小学校の統廃合を進めた。しかし実際には旧村を基礎とする利害が絡んで難航し、紛糾・紛争も絶えなかった。

ところでここで学校統廃合といった場合さまざまな類型があった。同一校長のもとで校舎を統合するのが完全な統合であるが、名目的あるいは制度上は統合しても校舎そのものの統合に至らないものもあった。この場合は統合は不徹底ではあるが、同一校長のもとで教育方針と教授内容を統一することはできた。他に、校舎の一部を統合し他は低学年の分教場などとして存置するものもあった。

当時、小学校の統廃合には住民の反対や疑義も多く、学校の大規模化を招くという問題も指摘されていた。そうしたなかで、学校の大規模化に対処しつつ学校統合の効果を上げた事例として、西越村に近い南蒲原郡三条町の三条尋常高等小学校の統合後の取り組みが、新潟県教育会の機関誌『越佐教育』（昭和3年11月・12月）に掲載されている。ここでは学校組織の系統化を図ることで大規模化の欠点を克服したことを論じつつ、それにもまして、小学校が町村における「全き社会人の教育」「善良なる自治民の育成[7)]」を実現する体制を築いたこと、そのためには1町村1校舎1校長が最善であることを強調している。

（3）西越村の小学校統合

西越村でも、1930（昭和5）年頃から西越と上西越の両尋常高等小学校の統合が村会などで議論された。この頃、統合に向けて熱心に行政を動かしたのが時の助役であった金泉（かねいずみ） 茂（しげる）であった。金泉は1901（明治34）年3月に西越村の旧家に生まれ、明治大学専門部法科を卒業後、西越村に勤め1931（昭和6）年3月から助役となっていた[8)]。金泉は「村政の面では合併以前の旧部落根性があらゆる面に支障をきたす[9)]」との認識から、その問題の抜本的な改善を図るため、小学校を1村1校とすることに着手した。そこで彼は、「子供のうちに村民の融和と協同の精神を培って、村民融和の基をつくり、同時に農村子弟の教育に力を集中」するため、「西越村の中央――大門（だいもん）部落の高台に西越中央校を建設し、両小学校尋常科六年生と高等科

生徒全員を中央校舎で教育」することを企図した。さらに、「中央校に専修農学校と実践女学校を併立し（中略）農家の子弟[10]」の青年教育を行うことを構想した。しかしながら村内有力者の多くがこの計画に反対し、この中央校舎設置計画は簡単には進まなかった。

そこで金泉はまず、上西越尋常高等小学校（川西地区）と、西越尋常高等小学校（沢田地区）を統合して西越尋常高等小学校を新たに創設することから進めた。両校は1932（昭和7）年6月1日に統合し、校舎はそれぞれ上校舎・下校舎（すでに1928年に新築）と称した。なお、同村内には、南部山間地の相田（あいだ）地区に分教場（分校として1970年まで存在）があった。これら三つの校舎を存置しながら統合したのであった。そしてそれを束ねた校長が、1931（昭和6）年3月31日に統合前の西越尋常高等小学校に就任していた布川準一郎であった。布川は、その後1940（昭和15）年3月まで断続しながら前後10年間、西越尋常高等小学校の校長として学校経営に当たった[11]。

（4）実業補習学校改革

小学校の中央校舎建設の前に、金泉は、実業補習学校の改革を実施した。上西越実業補習学校（1918年創立）と西越実業補習学校（1919年創立）がそれぞれ小学校に併設されており、大正末期にはともに「農業補習学校」と改称していた。そしてこの二つの補習学校は小学校と同じく1932（昭和7）年6月に統合して「西越村西越青年学校」と称した。1920（大正9）年の実業補習学校規程で学校名称の制限がなくなったので、「青年学校」という名称が用いられたのであったが、この学校はすぐに、女子部は「西越村家政女学校」（1932年9月設置）、男子部は「西越村西越専修農学校」（1933年4月・「青年学校」を改称）と分離・改称した[12]。二つの学校に組織上分離することになったのであったが、実際は、西越尋常高等小学校に併設された実業補習学校の男子部と女子部であり、校長はともに布川準一郎が兼任した。布川は小学校を含めこれらの学校をまとめて「心耕学園」と名付けている。

（5）中央校舎の建設と「心耕学園」

1933（昭和8）年2月、時の村長の辞任により、金泉茂は助役のまま村長代理となった[13]。金泉は、「頭脳頗る明晰気骨瞭々行政手腕凡を抜き[14]」と評されるその本領を発揮し、いよいよ年来の構想であった中央校舎の建設に着手し、あわせて一挙に懸案の構想の実現を図ることとした。すなわち中央校舎を設置するとともに、そこに男子の「農業学校」と女子の「実践女学校」をともに併置して、村の青年のための中等程度の教育機関とすることであった。そのため多額の経費が必要となったが、彼は精力的に村内の有力者を説得し、粘り強い交渉を継続した。その結果、村債や低利国庫融資が認められ、ようやく中央校舎建設について村民の承諾を得ることとなった。まだ30代前半と若かった金泉であったが、自説を曲げず、村内有力者を一人一人説得するなかで、ついに敷地買収と多額の建築費の調達に成功したのであった[15]。

こうして、1934（昭和9）年10月25日、出雲崎駅西の丘陵地・妙法寺山に中央校舎が竣工した。名実ともに「心耕学園」の誕生であった。金泉茂は1938（昭和13）年3月から1941（昭和16）年11月まで村長として村政を担い、西越尋常高等小学校の布川準一郎とともに「心耕教育」をつくりあげることに尽力している。心耕学園は、まさに金泉茂と布川準一郎が「一心同体」[16]になって生み出したものであった。なお、戦後改革で創設された西越高等学校は、全国的には極めて珍しい村立高等学校として誕生したが、発足時には「心耕学園」の中央校舎を継承し、その高等学校の源流を「心耕学園」の専修農学校と家政女学校においている。金泉と布川の創造した「心耕教育」の伝統は、戦後に脈々と受け継がれたのであった。

（6）中央校舎の竣工

1934（昭和9）年10月25日にこの中央校舎は落成し、小学校の尋常科6年と高等科の児童および専修農学校と家政女学校の生徒を収容した。尋常科6年生150人・高等科全学年101人、そして専修農学校109人・家政女学校132人、あわせて12歳以上の男女計500人ほどの学び舎であった[17]。

後に述べるように落成後の11月4日から6日の3日間、この新築校舎で、新潟県教育会と共催して小学校・実業補習学校学習・経営研究大会を開催した[18]。また、11月12日には全村民を招待して落成祝賀式を挙行した。この落成式の祝辞で、金泉村長代理は、この校舎建設の意義と今後の抱負を以下のように述べている。

「この大事業は本村にとっては歴史的大事業で只（ママ）に小学、補習教育上の経費節約、教員間の暗闘防止の利益であるのみならず村治上人心不統一の弊を除去し所謂部落根性を解消して挙村一致的根本の大計であって当代村長各位の賢明は不朽であろうかくして補習教育の改善に就きては土地（ママ）産業教育に重きを置き通年三ケ年制の実行は大奮発を為したるものである。（中略）向後一層挙村一致の美風を宣揚して非常時農村の更生、新興の為めに倶に共に努力、貢献を致したい。[19]」

2．布川準一郎の生涯と思想

（1）生い立ちと経歴

布川準一郎は、1899（明治33）年3月19日、新潟県三島郡出雲崎町井ノ鼻の菅沼藤市・イシの五男として生まれた。幼少期より身体が大きく活発な子どもで、「元気のよい子で囲炉裏を回って通ることをしないで、真直に飛んで火箸を足に刺したり、やけどなどしていつも怪我の絶えない子であった[20]」といわれている。1912（明治45）年、高等小学校第2学年の時、全国図画展で表彰を受けている。絵は小さな頃から得意で、後には、豪山と号して、趣味で油絵を描いている。高等小学校卒業後、長岡区の裁判所雇として出雲崎出張所に勤務したが、1915（大正4）年4月、新潟師範学校第一部に入学、第1次大戦から大正デモクラッシーの勃興期に学生時代を送った。

師範学校では優等生として知られる一方、剣道を良くし卒業前に初段、卒業後に2段を取得した。同僚の教員は後に、「二段なぞは滅多にない頃の有段者だった。長身、二十四貫の巨体を飛ばせて、三段四段の有段者の試合に、颯爽として審判される姿は今もなお眼底から消えない[21]」と回想している。1919（大正8）年3月に卒業後、満20歳で西越村の上西越尋常高等小学校に勤務した。実兄の菅沼正俊が校長をしていた学校であった。彼の弟２人も教員となっており、菅沼家は三島郡の教育者一家として知られていくことになる。

彼は、1923（大正12）年11月30日には、三島郡関原村関原（現長岡市）の布川彦治の三女千代と結婚し、婿養子として布川家を継いだ。翌1924年には長岡女子師範学校の附属小学校訓導として抜擢され、1928（昭和3）年3月まで勤務した。布川の死亡を伝える『教育週報』は、「長岡女子師範附属出身で同校始まって以来の大人物と謳はれた[22]」と記している。布川は、その後校長となり、南蒲原郡中之島村の中通小学校そして福多小学校の校長を歴任して、1931（昭和6）年年度に西越尋常高等小学校長に就任、西越青年学校（後、西越専修農学校）と西越家政女学校の校長も兼任した。33歳の青年校長であった。

（2）骨肉腫とのたたかい

1935（昭和 10）年 10 月、布川は村内 3 か所の校舎を自転車で巡回中に事故により右腕を骨折した。その後それが元で骨髄性リンパ腺肉腫となり、新潟医科大学附属病院や東京癌研究所附属病院などで治療し、入退院を繰り返しながら校長を勤めることとなった。1939（昭和 14）年 11 月には右腕の切断を余儀なくされ、1940（昭和 15）年 3 月末、ついに 41 歳をもって退職することとなった。最後は、延命のため「精神修養」にすがったが、退職から 2 か月ほどして 5 月 28 日についに帰らぬ人となった。同年の 3 月 25 日は布川校長最後の卒業式となった。布川は渾身の力を振り絞って務めを果たし、「終わるや室に伏す[23]」という状態であったという。退職の挨拶状は以下のように綴られている。志半ばという無念さに溢れている。

「（前略）扨小生事校舎巡視の途中負傷致し、それが起因で病を得、此際職を辞し専ら郷里三島郡関原町に於て静養致すことになりました。顧みすれば教員生活満二十一年、西越校前後通じて十三年、校長として心耕学園の経営当たりますこと満九年であります。その間何くれと陰に陽に御援助を賜り、今日の栄を得させて戴いたことを心からお礼申し上げます。今後療養に専念し、全快の上は再び御奉公の機到らんことを心待ち致して居ります。（後略）[24]」

手術を重ねても進行を止めることのできない病魔とのたたかいは、「剛毅不屈の猛将」といわれた布川にとっても精神的にたいへん辛いものがあった。布川は、当時最先端のラジウム治療を行ない、東京癌研究所の附属康楽病院に 5 回入院している。その間妻子に多くの手紙を送っているが、左手で書き綴られた手紙には、苦しみを妻に吐露したものも少なくない。

「千代子、今日も日が暮れる。何たる人生、悲惨だ。ここ数年間全くどうなるかわからなかった。又この上の大手術でもするようになれば人生暗黒だ。私はつかれた。毎日のガーゼのつめかえもまだ肉の中に二寸以上もつめるのだ。私は毎日、こうやって千代子に手紙を書くのだ。正直に何もかも話すのだ。心配せんでもよいが苦しい毎日だ。手を自由に使っている人を見るとうらやましい。[25]」（1937 年 3 月 4 日付の手紙）

病魔に冒された布川は、妻を愛し妻を心の支えにしていた。こうした手紙の文面を今私達が知ることができるのは、妻千代子が入院先からの手紙 35 通を日付順にノートに採録していたからであった。千代子夫人は布川が気に懸けたふたりの遺児を、戦後の貧窮の中で立派に教師として育て上げ、1984（昭和 59）年 3 月 9 日、81 年の生涯を閉じた。

（3）人柄と性格

布川の実家の菅沼家は教育者一家であった。長兄の菅沼正俊も新潟県の小学校長を歴任し、戦後は新潟明訓高校教諭にもなった。性格は謹厳実直、あだ名が「教育勅語」であったといわれている[25]。弟の菅沼秀雄、菅沼健一郎も小学校などの教員を勤めた。兄正俊は準一郎の性格について次のように評している。

「準一郎気宇豪快にして、進歩的で熱誠以て教育に当たる、剣道に長じ、身体巨大、併せて豪勇と言うべきである。然るに身体虚弱なる兄私に対し、懇ろにして常に慕うの情が強かった。人に対しても温情に富親切であった。[26]」

身長 1 メートル 73 センチ、体重 90 キロ、「みずから豪山と号した偉丈夫」であった。病気が進行してからも周囲の人々に温かく接していた。あるとき部下の教員の母親が急病になったとき、すぐに担架の準備をさせ病院に運ばせ、自らは残され家族のために食事を作って運んだことがエピソードとして伝わっている[27]。「談論風発、よく笑い、よく論じ、形式ばるところが」なく、「純情で正直な人柄」であったといわれている。座右の銘は「真理の前に頭を垂れよ」であった[28]。

布川は学校経営において、学歴や卒業学校にこだわらず一芸に秀でた人、努力実践するタイプの教員を集

めた。そのため「心耕学園」には個性的な教員が集まったといわれている。よく教員たちと座談会を開き、さまざまな教育課題や人生観を語り合ったといわれている。また一番嫌っていたのは、「全国、全県画一の『法規学校』、『法規教育』であった[29]」といわれている。

（4）思想形成

①小原國芳との交流

布川準一郎の教育思想はどこで培われたのであろうか。まずもって玉川学園の小原國芳（1887 年－1977 年）とのつながりが強いことがうかがわれる。1935（昭和 10）年 6 月、「心耕学園」の教員 10 余人が玉川学園を視察しており、玉川学園からも 1938（昭和 13）年 6 月、小原國芳園長ほか 14 人が「心耕学園」の授業を参観している。この間に、1937（昭和 12）年 9 月 25・26 日に開催された「心耕学園」の学校経営研究会に、小原國芳を講師として招いている[30]。

では小原國芳と布川準一郎の出会いはいつだったのであろうか。1927（昭和 2）年 4 月、小原國芳（成城学園主事の頃）は長岡市で講演を行っている。新潟県と長岡市・古志郡の 3 教育会が共催した講演会であった。当時布川は長岡女子師範学校附属小学校訓導であったので、この小原の講演を聴いている可能性が高い。あるいはここで小原との出会いがあったのかも知れない。小原は、1919（大正８）年、澤柳政太郎が成城学園を創設する際、長田新の推挙で成城小学校主事（訓導）になり、1921（大正 10）年には、八大教育主張講演会において「全人教育」の理念を唱え、1926（大正 15）年には成城高等学校校長となっていた。そして、小原は 1927（昭和 2）年 4 月の講演会で、真・善・美・聖の理想を目指す全人教育を軸に新教育論の自説を展開している[31]。

ちなみに、小原は、1933（昭和 8）年秋には佐渡にわたり島内各地で講演するなど、新潟県内の新教育実践に大きな影響をもたらした。同年冬には直江津・青海川など上越地方で講演し、1934（昭和 9）年と 1936（昭和 11）年に新発田・新潟、岩船郡へ、そしてその翌年には「心耕学園」に来ている。いずれも講演などを実施し、県内各地の教育に影響を与えている。また、小原は、当時、松下村塾などの近世の私塾にこそ教育の最もすばらしい本質があったと考えていた。この点は小原も布川も共通していた。

②入沢宗壽の影響

布川に影響を与えた教育学者としては、落成記念に合わせて実施された新潟県教育会主催の小学校・実業補習学校学習・経営研究大会の講師に招聘した入沢宗壽（いりさわ むねとし）（1885 年-1945 年）が挙げられる。入沢の専門は欧米教育思想史であるが、「体験学校」と称する新教育の実践的研究を川崎市立田島小学校で行ない、野口援太郎らと協力して新教育協会を設立するなど、新教育運動の推進者として知られた。教育と教育学に関する入沢の課題意識はきわめて広く膨大な著書があるが、地域社会での体験と生活に裏打ちされた全人的な人格形成の重要性は、入沢教育学の一貫して主張するところであった。

なお、西洋教育史の研究から教育学を始めた入沢であったが、1930 年代には日本の伝統的教育の再建を強調している。『日本教育論』（同文書院、1934 年）、『日本教育の伝統と建設』（目黒書院、1937 年）、『日本教育学』（東洋図書、1939 年）にその点が詳述されている。神道・儒教・仏教を柱として展開されてきた日本人の人間形成の伝統が、明治以降、外来思想の流入と宗教教育の排除によって分断されていること、それが近代日本教育の決定的な問題点であると論じている。

③新教育論

「心耕学園」において布川校長の下で教員として過ごした池上大一は、布川が「オットーやナトルプの影響を受けていたことは間違いないと思うが、ナトルプの社会共同体の流れを汲みながら、デューイの経験主

義教育哲学や、コミュニティースクールの考え方を多分に取り入れられていたものと考えられる」と推測している。オットーとはドイツの新教育運動家のベルトルト・オットー（Berthold Otto ：1859 年－1933 年）のことで、布川も著書で直接論及している。オットーは、家庭教師として生計を立てるなかで、子どもたちの興味関心から出発する教授法として合科教授の理論を作りあげた。分立した教科からなる学校カリキュラムを改め、教科相互の関連性を見直し、教科横断的な学習を実現しようとするもので、子どもを主体とするカリキュラムの構造改革を目指した。その学校はオットー学校と称し、連続した発達段階に即した柔軟なカリキュラムを提供するものであった。しかし、オットーは公教育に期待せず、1906 年にベルリンに家庭教師学校を開設して、優秀な家庭教師の育成に努めた。布川の教育論には、子どもを主体とした教育課程の全体性を重視する考えがあり、しばしば公教育の枠を越える傾向が見られる。オットーの思想の影響といえるのではないだろうか。

そのほかルソーやペスタロッチの著作も読んでいたといわれるが、退職後、死の直前、「すべての書物や資料に署名して、それに左手書きの色紙や短冊を添えて[32]」知人に送ったといわれている。したがって、布川がどのような書物を読んで思想形成をしたか、それを知る資料に乏しいが、池上大一は次のように回想している。

「私どもは勉強したい本をどんどん買ってもらった。だから高価な本が読まれた。しかしその後になると校長室へ呼んで、その読んだ本の内容や、それに対する意見などを話させて耳をかたむけられた。布川校長は非常な勉強家でいつ眠られるのかと思うくらいに、夜を徹しても読書されたようだった。[33]」

布川準一郎は中越地方の農山村にありながらも、このような人々や多くの書物から学びとったことを、地域の実態に照らして自己の教育信条として紡ぎ出し、独自の「心耕教育」を創造していったといえよう。

3．「心耕学園」の教育原理

（1）「心耕」の意味

布川準一郎は、1933（昭和 8）年 10 月に、『小学校・補習学校　学習と経営の新研究』を刊行した。その書物の冒頭で「心耕学園のめざすところは、耕せ心培へ力[34]」であると述べている。そして、学園の名称に「心耕」という言葉を選んだことについて、以下のように述懐している。

毎夜深く考え悩んでいたが、ある夜、ルソーの『エミール』の訳書を読み進めていくうちに、その訳書の行間に書かれた手書きの欧文文字を見つけた。それは文化を意味するラテン語の文字（cultus）で、その文字から「文化」の語源が自然を耕すことにあることを思い出すと同時に、心を耕すこと、すなわち「心耕」という表現を思いついたというのである[35]。

同書で、布川はそのことを「神の霊験」と表現し、文化の創造は「人間の世界にのみ許された特産」で、「霊と肉との交渉としての人間的自我の所産」と論じている。その観点から「心身一致、物心一如、霊肉一元の人間生活の本質」に立帰ることを主張し、「書物の学校を去つて労作の学校へ」、「読む学校から作る学校」へと転換することの大切さを主張し、精神と物質、理念と現実との統一のなかで文化を創造し、心を磨くことが人間の本質的な営みであると述べている。ついで、心耕学園の教育方針として、「時代の思潮要求」を考慮すること、「児童生徒の個性生活」に即すること、「郷土の現在将来に立脚」することの 3 点を視点として、生活・個性・労作・郷土を重視することを論じている[36]。

（2）生命的労作教育

布川の教育論は、一語でいえば「生命的労作教育」であった。布川は学園を一つの社会共同体とみなしていた。それは擬似的共同体ではなく文字通りの生活共同体であった。布川によれば、生活とは根底的には「生命の維持発展に努力する活動」であって、それこそが労働、働くことの目的であった。そして「働くことが人間の地上における神聖なる義務」であると捉え、それゆえ「働くことを教へ、働く人を育成する」のが学校であり、教育の目標であると考えている[37]。もはや労作教育は教育の一方法や領域ではなく、教育の理念であり、教育全体を貫く太い柱となっているのである。

さらにその生命的労作教育の在り方については、第一に、「利己的な経済観念を排撃」し、「社会的奉仕的活動」へ導くものでなくてはならないとし、第二に、労働の幸福とは「刹那的現実的な満足幸福」ではなく、「真理と正義」のため、「美と善」のために生き、かつ努力することであるとしている。ところがそうした絶対的価値の総合体を、布川は結局「民族的精神」に求めてしまっている。真理・正義・美・善などのために働くことは、「民族的精神の永遠なる発展」のために生きることになるといい切っている[38]。この結果、布川の生命的労作教育論は全体主義的な国家主義と強く結びつくことになったのであった。

しかしその一方、労作教育の労作は、子どもの中にある「個性的小宇宙」を尊重すること、子どもの自主性を重んじ「自立的活動」として実施すること、そして子どもの成長が判定しやすい「教育的労作」でなければならないことを付言している。子どもの個性や自主性を特に重視しているのである[39]。

（3）教師論

『小学校・補習学校学習と経営の新研究』は、布川の「心耕教育」の進むべき道を述べた書物で、理念的・原理的な面が中心となっている。「訓練論」は自由が、「学習論」は個性が、「教材論」は発達段階がそれぞれ大きなテーマとなっており、新教育実践家としての面目躍如とした内容となっている。しかし最も印象的なのはそれらに続く「教師論」である。教師にとっては、教育愛が最も大切であり、真の愛は「児童に自奮の気概を養ふ」ことであると断言している。

また、子どもの個性尊重を叫ぶ限り、教師の個性を尊重しなければならないとし、教科担任制の導入を主張している。ただし、「各々の個性に依つて児童の生活に働きかける」、すなわち個々の教師が独自の切り口で子どもを育てるのであって、専門分化した教育をするためではないとしている。また、すべての教科が「修身的陶冶」を含んでいるので、「修身科と称するものゝ現下の様式は必要ない」と明言している。いわゆる特設した修身や道徳を否定しているのである。そして結論的に、教師もまた子どもと一緒に「教材の持つ魂」に触れることを何より重要であることを、次のように論じている。

「商人が商品を味はずして商ふが如く、其の教材の持つ魂にふれず味はずして児童に授け導くことは甚だしい危険であります。常に学級教授に於て其の日其の日を追はれ教材に徹し味ふの余裕さへ持たぬ現下の教育組織は児童にもこの尊き魂をふれ味ふことなく淋しい日を送るこの弊を一時なりとも除かねばなりません。[40]」この言葉は、今日において多忙を極める多くの教師たちにとって、いささか耳の痛い言葉であろう。

（4）生活統整合科学習・統化教科担任制

布川準一郎の「心耕教育」では、新教育としての在り方の重要な要素の一つに合科学習があった。彼は、合科学習の理論として、B．オットーの児童中心主義的な合科学習論を基礎にしている。そして、布川なりに合科学習の特長を以下の 8 点にまとめている。

「一　家庭生活の如き親しみある生活が出来る　二　各種の教科内容に触れられる　三　実事実物実生活

を材料として環境に即して学習が出来る　四　児童は自分の個性を生かし能力を挙げて働かれる　五　郊外に於て学習することが多い　六　作業本位に休憩がとられる　七　時間割編制の不可能　八　教科書を第二義的に取り扱う[41]」

合科学習の実施は、まさに自由教育と児童中心主義を不可欠のものとしているのである。布川は、合科学習を大中小の3段階に分けている。尋常小学校の第1学年では全学校生活を学習活動とする大合科を、第2学年では文科・理科・美科の3領域に分けて学習する中合科を、そして第3学年では、中合科より分化させた小合科をそれぞれ実施している。なお、その合科学習を、生活学習を根幹とした系統的に秩序立てた学習という意味で、自ら「生活統整合科学習」と名付けている。

その様子を、当時の教師の1人（池上大一）は次のように説明している。

「例えば一・二年で兎を飼っていた。大合科では可愛がって世話をしたり、自他の未分化時代を兎と共に感情し、意志したり、遊びの中で生活する、その中に学習が生ずる。中学年の中合科では兎の観察やら記録やら理科学習への橋渡しになる。五・六年生になると兎は理科として取り扱われる部面が分科して出て来る。専修農学校では屠殺から、なめし皮の製作ができる。皮の染色をする。兎の肉の保存法として燻製や缶詰を作る。女子家政学校の方では兎の毛皮をチョッキに縫製する。製品は販売する。経理は簿記を習って実際に経理する。収入は次の実習費となる。豚も同じ。山羊も同じ。豚の出産間近になると教師も生徒も畜舎に合宿する。空理空論の教室授業でなくなってくる。こうして合科学習の理念は学習形態や、教授形式でなくて現実の、のっぴきならない生活学習の一環である。[42]」

また尋常科4年から高等科2年（最終学年）までは、前述したように、個性の伸長を図るため教科担任制を実施している。さらに、それぞれの教科担任の教師は固有の教室を与えられ、それぞれの教科にふさわしい教室環境をつくることが配慮されている。これを名付けて「統化教科担任制」と称している。これはのちに述べるように塾形式の導入に発展するのであるが、合科学習も教科担任制（塾）についても小学校・専修農学校・家政女学校ともに共通で実施されている。

4．「心耕教育」の展開

「心耕学園」では、前述したように1934（昭和9）年11月4日から6日まで3日間かけて、県教育会と共催して小学校と実業補習学校の学習・経営研究大会を開催した。これは「心耕学園」の中央校舎の新築落成を祝って企画したもので、初日は小学校を、2日目は実業補習学校を対象としていた。初日には、東京帝国大学教授入沢宗壽の「生活体験の教育」と題する2時間半にわたる講演があった。その後、布川準一郎をはじめとする「心耕学園」の教員の報告があり、同校の授業実践が公開された。最後に「心耕学園」の児童・生徒による創作児童劇（「小木の落城」「村の良寛様」）が上演された[43]。

2日目は、「心耕学園」の専修農学校と家政女学校の農産加工、ラジオ・新聞を使った授業、染色、手芸、郷土学習などの授業見学会が実施され、座談会で、布川の補習学校に関する「学習と経営の問題解決体験談」が語られた。3日目は朝から心耕学園校舎内の「心耕道場」と称する部屋で、参加者によって「修道の行」（静座・瞑想）が実践された。その後、島根県立益田農林学校の大橋清蔵校長による「農村教育の狙ひ所と将来」と題する講演が行われた[43]。この研究大会には県内を中心に300人余りの参加者があり、その反響の大きさは関係者を驚かした。この研究大会以来、「心耕学園」は、新潟県下はもとより全国的に有名になり、「教生やら、参観人は毎日絶えることが無かったくらいだったが、毎日のことで覚えていない。[44]」という状

態であった。

「心耕学園」における最大の研究会は、1937（昭和 12）年の 9 月 25・26 両日の研究大会であった。小学校と実業補習学校を 1 村 1 学区として「心耕学園」が出発してから 5 周年を祝す研究大会で、県内各校の校長 200 余人を含む三百数十人が参集した大規模なものとなった。その内容は、「合科学習」「適性教育」「労作教育」を柱としたもので、参観者にそれらの活動を公開し見学してもらい、その意義を訴えることが目的であった。なお、この時期には「心耕学園」では、「適性教育」の名のもとに、課外のいわゆるクラブ活動が盛んに行われていた。

両日とも午前中は、国史・綴方・算術・体操・手工・裁縫の合科学習指導と農産会・家政研究会・書道会・理化学研究会・「名所と旅の会」の「適性指導」を公開した。講演は小原國芳の「自己発見の教育」と新潟高等学校の御雇外国人教師 J.フィッシェル（1932 年から 45 年までドイツ語担当）による「独逸教育と良寛に就いて」であった。また児童・生徒の公開演技としては、初日に琵琶・謡曲・唱歌・舞踊があり、2 日目に郷土学芸会と称して、茶の湯・唱歌・独唱・舞踊・演劇（「良寛様」）などが上演された[45]。

この研究大会に講師として参加した小原國芳は、その様子を次のように伝えている。

「校長はじめ先生方、児童、打って一丸。ピッタリ魂の解け合った修行場。なるほど心耕学園だとうなずける。（中略）それから教室へ。教室というよりは各塾へ。各教室が先生の拠城である。客間である。研究室である。子供との楽しい家庭である。火鉢もある。鉄瓶は湯気を立てておる。お茶も飲める。低学年の全科学習、枝豆の研究から、国語、裁縫、数学、地理、さらに理科室のすばらしい工夫、更にクリーニング、毛皮の手入れ、豚の去勢、カンズメ製造、盆栽、鶏に、豚に、山羊に、鯉に‥‥園芸に、天文観測に‥‥なかなかの苦心。さらに拡声器から医務室、地蔵さんから体操、池に畑。更に古器物の採集に諸教材蒐集、特に苦心されたものは各学年各学科各科に対する実に周到なる教科解説、研究法の苦心、教材蒐集。これらは実に他に見られない。恐らく世界中容易に発見出来ない苦心である。玉川の小学部の先生方をみな連れて来たかったのですが、旅費の都合で私一人来たのですが、全職員夜行で明朝まで来いと打電したかったです[46]」

当時の新聞は、「是種の大会としては稀有の盛会を極め」、「斯界に大なるセンセーションを起した」と報道している。その一方で、「当然のように各方面から異議もあり、批判も出た。中には、明らかに白眼視と思われる視線にも出合った。」といわれている。「心耕学園」が有名になると、「やっかみや批判も多かった」ともいわれている。また、研究大会に出席した新潟県視学は、「学校当局の熱心と村当局の理解とに敬服する」と称賛する一方、以下のように論評している。

「適性教育、合科教育は現在の法規通りに行ふことは困難であるも、本校の経営施設には無理がない。乍併若し一歩を誤ると却つて不良と為るから深甚なる注意が肝要だ抑々国家の教育方針には国の型がある之を犯さぬ様にすることに留意せねばならぬ[47]」。自由教育の行き過ぎに注意するようしっかりと釘を刺しているのであった。

まとめ

「新教育」とは、一般的には、旧来の既存の教育の問題点の克服を目指す新たな教育の試みを意味するが、歴史的には、19 世紀末から 20 世紀初めにかけて欧米諸国を中心に世界的に広がった教育改革運動をさし、教師中心、教科中心の教育を批判し、子どもの活動・生活・興味を中心とした教育への方向転換を本質としていた。日本では大正期に、自由教育、労作教育、合科学習などが展開され一世を風靡した。小原國芳は、新教育論者として当時「全人教育」を標榜し全国を巡ったが、そのなかで布川準一郎の「心耕教育」につい

て、「率直に申しますと、明石の及川さんの『動的分団式教授』にせよ、千葉の手塚君の『自由教育』にせよ、尊いものではあったろうが、教授や学習の一形式であって、内容の如何は（中略）布川兄の西越の豊富さや深さには、遥かに及ばなかったと思います。[48]」と評している。

布川準一郎の「心耕教育」は、児童・生徒の発達を基礎的視点とした合科学習の組織、地域に根ざした労作教育の展開、地域社会と学校との一体性を内容としていた。しかも、それらは理念と原理、組織と実践が教育学的に体系化されており、その点で優れた教育論、教育実践として高く評価できるものであった。残念ながら「心耕教育」は、布川準一郎の不慮の死によって、次代に継承発展されることはなかったが、教育史の上で、独自の体系的な新教育実践としてもっと注目されて良いであろう。

前述した『新教育の先駆者――資料　布川準一郎と心耕学園』において、五百川清は以下のようなエピソードを記している。

「私と心耕学園との出会いは、前述の『新潟県教育百年史』の編集作業の中でした。最初の印象は奇異なものでした。公立の学校が私塾や社会教育（私の執筆担当した分野でした）の施設のように心耕学園という看板を掲げ、他の学校と異なるユニークな教育を行っていることが不思議に思えたからです。この奇妙な印象は、そのまま頭に残っていたのですが、一昨年、新潟県教育委員会を通して文部省から依頼がありました。『郷土に生きる教育家群像』の一人として、大正から昭和にかけての新潟県の人物から選んで書いてほしいとのことでした。すぐ、頭にひらめいたのは布川準一郎でした。（中略）資料のほとんどは既に与板町の石黒秀一先生が収集、整理されておられ、（中略）短い期間で文部省への原稿送付ができたのですが、暫くして、原稿は送付されてきました。丁重な書状が添えられていて、編集担当者の『涙がでるほど申しわけない』との苦しい立場が書かれていました。『ただ一つ“あの当時の学校制度”を考えれば、そのことがネックとなりました。それ以外はこれからの教育の場にはさかんに言われることかと存じおります。』と記され、結局、公立学校でありながら国の制度や方針から逸脱している布川準一郎の教育は、文部省編集の雑誌には掲載できないということなのでしょう。今さら、布川準一郎の心耕学園の持っていた特異性、そのユニークな性格を再認識させられました。[49]」

布川の「心耕教育」が、本質的に公教育の枠を打ち破るものであったことを文部省当局は鋭く看取したというのである。公教育の限界に挑戦した「心耕教育」は、公教育を主宰する行政から忌避され、地方教育史の草莽のなかに埋もれ去ったといえるのではなかろうか。今日、新教育については、「華々しい理論と実践の舞台となったのは師範学校附属小学校や私立学校に限定されていた」、そして「文部省の圧力によって大正後期にはしだいに低調となっていった[50]」という理解が常識的になっている。しかし、地方教育史の史料を丹念に発掘すると、農山村の公立学校における珠玉のような新教育実践をしばしば発見することができる。また　その時期は1930年代末までも降ることができるものも多い。さらに戦後の地域教育実践へと継承されているものもある。そうした教育実践の事例は、われわれに対し、これまでの新教育の歴史に対する見方の修正を求めるものである。

注

1）小原國芳編『日本新教育百年史』（玉川大学出版部、1969 年）の第 5 巻　中部編・新潟県の章（小菅任助・松岡市栄門執筆）p.43。
2）『新潟県教育百年史』大正・昭和前期編、新潟県教育委員会、1973 年、pp.407-711。
3）『出雲崎町史』通史編下巻、出雲崎町、1993 年、による。
4）『出雲崎町史』（資料編Ⅲ近代・現代、出雲崎町、1989 年）の年表「昭和の出雲崎町」による。
5）元出雲崎町長・南波益夫「温故知新」新潟県立西越高等学校『西古志－創立二十周年記念誌』1969 年、p.122。および『西越小学教育百年史』南波益夫発行、1973 年、p.59。
6）「初等教育の改善（県学務局）」前掲『新潟県教育百年史』大正・昭和前期編、p.1184。
7）三条尋常高等小学校「一町村一校主義教育の理論並実際」新潟県教育会『越佐教育』1928 年 11 月・12 月号。
8）金子信尚『新潟県人名辞書』1941 年、p.235。
9）前掲「温故知新」『西古志－-高校二十周年記念誌』p.122。
10）同上。
11）前掲『西越小学教育百年史』pp.164-165。
12）前掲『出雲崎町史』通史編下巻、p.262。
13）前掲『出雲崎町史』（資料編Ⅲ近代・現代）の年表「昭和の出雲崎町」による。
14）前掲『新潟県人名辞書』p.235。
15）大西総治『郷土先賢の遺芳』西越村公民館、1955 年、pp.64-68。
16）日浦宣治「心耕学園を想う」前掲『西古志--創立二十周年記念誌』p.35。
17）前掲『新潟県教育百年史』大正・昭和前期編、p.408。
18）彙報「初等教育学習及経営研究大会」「補習教育研究大会」新潟県教育会『越佐教育』1934 年 10 月。
19）『中越新報』」1934 年 11 月 12 日、「祝西越村中央校舎落成」の記事による。
20）石黒秀一「布川準一郎という人」五百川清編著『新教育の先駆者――資料　布川準一郎と心耕学園』（新潟雪書房、1994 年）所収、p.13。
21）池上大一「布川準一郎校長と心耕学園」新潟大学教育学部附属新潟小・中学校内教育研究協議会編『教育にいがた』第 75 号、1975 年。前掲『新教育の先駆者』中に転載、p.50。
22）「昭和十五年五月心耕学園創設者、布川準一郎の死亡」『教育週報』1940 年 6 月 8 日。
23）前掲「布川準一郎という人」前掲『新教育の先駆者』所収 p.18。
24）同上書 p.17。
25）同上書 p.20。
26）同上書 p.13。
27）荒木スミ子「心耕学園と父の思い出」前掲『新教育の先駆者』所収、p.36。
28）前掲「布川準一郎校長と心耕学園」同上書 p.50。
29）同上書 p.46。
30）小原國芳「新潟行き」『小原國芳全集』第 22 巻（身辺雑記二）、1969 年、玉川大学出版部。初出は『女性日本』1937 年 11 月。
31）「小原國芳氏教育講演要領（一 1）」「同（二）」『越佐教育』1928 年 6 月・7 月号。
32）前掲「心耕学園と父の思い出」前掲『新教育の先駆者』所収、p.36。
33）前掲「布川準一郎校長と心耕学園」同上書、p.50。
34）布川準一郎『小学校・補習学校　学習と経営の新研究』太古勇次郎発行、1933 年、p.1。
35）同上書 pp.2-3。
36）同上書 pp.4-5。「心耕学園」の図式化された「教育の方針」による。
37）同上書 p.17。
38）同上書 p.21。
39）同上書 pp.23-34。

40）同上書 pp.90-91。
41）同上書 p.161。
42）前掲「布川準一郎校長と心耕学園」前掲『新教育の先駆者』所収、pp.48-49。
43）前掲「初等教育学習及経営研究大会」、「補習教育研究大会」および『中越新報』」1934 年 11 月 12 日「西越校の研究発表」の記事による。
44）前掲「布川準一郎校長と心耕学園」同上書 p.50。
45）『中越新報』」1937 年 9 月 27 日、「西越心耕学園　真教育の発表」の記事による。
46）前掲「新潟行き」。
47）前掲『中越新報』」1937 年 9 月 27 日の記事による。
48）前掲『日本新教育百年史』第 5 巻新潟県の章の「補遺――落穂ひろい」p.72。
49）前掲『新教育の先駆者』の「はじめに---発刊の経緯について」の箇所。
50）『日本大百科全書』（1984～1994 刊：全 26 巻、小学館）の「新教育」の項目（三原芳一執筆）。